Award of “Kachasha-Best Smile”

by Max Kimura

This year we faced some problems during our camping at Hermit Gulch. Due to lack of cabinet tents, the male students as well as I had to sleep in a small summer tent with “water drops alarm” in the ealry morning. One of the fire bases (left-up picture) was also closed because of “under construction.” However our camping could be executed successfully. Why? The answer is a smile.

This year’s Liveforum award was named “ Kachasha-Best Smile.”Kachasha is a title of Okinawa local song that the students used for their dance at exchange events. It means to extract the best one after scrambling all negative and positive feelings each one experienced in his or her daily life: Smile!

２０１８年９月２０日。私は１６期生一行とカタリナ島のアバロンに向かっていた。 北極から流れ込むチャンネル諸島の海流は夏でも冷たいのに、 高速船の左舷には、イルカの群れが気持ち良さそうに波乗りを楽しんでいる。 ふと呟いたーああ今年もラマダンがやってきたかと。

しかし、私は湾岸戦争の取材でアラブの地を踏んだことはあっても日の出から日没まで 飲食を断つ正真正銘のイスラム教徒ではない。私のラマダンとは、朝露に濡れて目覚めるテント生活のことであり世俗的な欲を捨て質素な日々を楽しむという意味。だが、同じく夏用テントで過ごすことになった男子学生は、このラマダンを受け入れてくれるだろうか。

そもそも今年のキャンプ手続きは受難続きで、大型キャビンの数が昨年よりも３張も足りないというのに、キャンプ料金は急騰。しかも新しい女性管理人は、チェクイン・タイムまでテントに入れないという。こんなことは過去１５年間一度もなかった。加えて、翌日から使用していた野外コンロの一つが工事中ということで使用禁止のはめに。しかし、私の心配は徒労に終わった。学生たちの顔は明るく、テントや野外コンロの不都合について文句を言う学生はいなかった。それは諦めではなく、環境の変化に臨機応変に対応している前向きな姿であった。

今年は、自然界の不都合もあった。恒例の星座観測が月明かりで、秋の星座がほとんど姿を消してしまった。しかし、月の隣に赤みを帯びた火星が並んで宇宙時代の格好の手本となり、月周旅行や火星移住の話に皆んな熱心に耳を傾けてくれた。

キャンプファイヤーの夜、多くの学生から飛び出した言葉は、「感謝」「前向き」「体験を医療研修に活かす」であった。ビーチで沖縄のカチャーシーを踊る学生の笑顔も素晴らしかったが、キャンプファイヤーに照らし出された一人ひとりの顔も満ち足りていた。この時、今年のライブフォーラム 賞は、カチャーシー・ベストスマイル賞と名付けることにした。全員甲乙つけ難いので、キャンプリーダーのゆうちゃんに代表して受け取ってもらった。あの日の笑顔をぜひ日本に持ち帰り、将来の看護現場に繋げていただきたいと思う。カチャーシー！　　ライブフォーラム （NPO）代表　木村正弘記